

体育科の本質

子どもは、運動の魅力にふれると「もっとやりたい」「うまくなりたい」という思いがふくらんでくる。思いがふくらんだ子どもは、どうしたらその運動ができるか試してみたり、自らを見つめながらその運動をやってみたりするなどして動き出す。そうして動き出すと、自分の目的を達成しようと試行錯誤したり他者と関わったりし、動きを創り上げていく。このようなプロセスの中で子どもは、仲間、相手、教具やルールなどの様々な対象と結びつきながら試行錯誤していくことで「自分にとって楽しい」「自分なりにできた」という感覚をつかんでいく。そうして、その子の運動への関わり方が変わっていくことを私たちは願っている。

そして、子どもがこのように運動する経験を積み重ねることで、自身の動きが変容したり、運動や仲間に対する見方・考え方が広がったりして、運動することの「楽しさ」や「喜び」を味わうことが、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育むことにつながっていくはずだ。

体育科の考える『その子らしく学ぶ』とは ～人間性の涵養につながる経験～

子どもは自らの内に「この運動をやってみたい」「運動ができるようになりたい」という思いをもっている。教材と出会い、運動の魅力にふれた子どもは、その子ならではの思いを表出しながら運動し始める。こうした思いが「もっと楽しみたい」「どうしたらできるようになるか」などと自分の動きを考えたり、友達のやり方を参考にしたりして動いていく原動力となる。そして「こうしたら楽しかった」「こうしたらうまくなってきた」などと振り返り、自身の動き方をよりよくしていこうと思考する。そうする中で、子どもは自分の目的をはっきりさせたり、友達の考えを知ったりして、自身の動きを広げたり高めたりしていくことにつなげていく。この過程において子どもは、ときとして運動に対しての見通しのもてなさから困り感を抱いたり、目指す動きの実現に向けての自身の「壁」と向き合ったりすることもある。そしてそれらを解消し乗り越えよう

と、くり返し動いてみたり、自分なりの見通しをもってこだわりながらやってみたりする。「自分なりにできた」と動きの広がりや高まりを実感したその子は、自分が創った動きを十分に発揮したり、友達に自分の動きを知ってもらったりしようとする。そのようにして、子どもの運動への関わり方が変わっていく。その先に、その子の「その子らしさ」が磨かれていくと私たちは考える。

これまでの実践から、以上のような子どもの自らの内にある思いが教材との



出合いを通してふくらむ姿、運動への関わり方が変わっていく中で自分なりの手応えを得ている姿が見て取れた。さらに、子どもにとっての「学び」についても一定の解が得られた。『その子らしく学ぶ』子どもは、自身で構築したプロセスにおいて自他の動きを見つめ直したり、動きにおける気付きを得たりすることで、自身の動きを広げたり高めたりしていく。これは体育科の教科の目標や内容等の習得につながる姿であるといえる。また、子どもが目指す動きの実現に向かう際に、困り感や壁を乗り越えようと試行錯誤したり、他者と協同的に活動したりする経験は、その子の「人間性の涵養」につながると考える。このようにして「教科の目標や内容等の習得」と「人間性の涵養につながる経験」を一体としていくことで「その子らしさ」がより磨かれていくのである。